

2021年度

愛知の生活科教育

(第27集)

も く じ

授業実践

| | | |
|-----|-------------------|---|
| 実践1 | (名古屋・伝馬小・大谷 恵里) | 2 |
| 実践2 | (春日井・岩成台小・近藤 香奈子) | 5 |
| 実践3 | (岡崎・六名小・中西 歩澄) | 8 |

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会生活科部会
2021年度 教育課程研究委員

ブロック推薦者

◎部長 ○副部長

| 名古屋 | | | 尾張 | | | 三河 | | |
|--------|-----|------|--------|-----|-----|--------|-----|-----|
| 氏名 | 単組 | 学校名 | 氏名 | 単組 | 学校名 | 氏名 | 単組 | 学校名 |
| ◎藤原真奈美 | 名古屋 | 西築地小 | ○村瀬 真弓 | 一宮 | 末広小 | ○八代 知里 | 豊田 | 堤小 |
| 東江 克佳 | 名古屋 | 八熊小 | 水上 麻未 | 春日井 | 西尾小 | 石川すま子 | みよし | 北部小 |

第67次～第70次教育研究全国集会レポート提出者

| 67次 | | | 68次 | | | 69次 | | | 70次 | | |
|------|----|-----|------|----|-----|------|-----|------|-----|----|-----|
| 氏名 | 単組 | 学校名 | 氏名 | 単組 | 学校名 | 氏名 | 単組 | 学校名 | 氏名 | 単組 | 学校名 |
| 後藤祐未 | 豊田 | 大蔵小 | 栗山美保 | 岡崎 | 岡崎小 | 一柳聡志 | 名古屋 | 神宮寺小 | —— | —— | —— |

第71次教育研究全国集会レポート提出者 近藤 香奈子 (春日井・岩成台小)

I はじめに

生活科教育の分科会では、栽培活動を通して、植物への思いや願いをもち、思考を深めた実践、身近な自然を生かした遊びやおもちゃづくり等、主体的に対象と関わる活動を通して、対象への愛着を深め、自信や自己肯定感の高まりをめざした実践など、15本のレポートが提出された。以下、本次教育研究活動の概要をまとめた。

II 第71次教育研究活動の概要

1 教育課程編成にあたっての基本的な考え方

○ 「基礎・基本」について

子どもたちは具体的な活動や体験を通して対象や自分自身についての気づきを得ていくことが生活科の「基礎・基本」となる。「基礎・基本」を身に付けるためには、子どもたちが繰り返し対象とかかわることができるような活動の時間や場所を保障することが大切である。また、仲間とのかかわりがもてる場を意図的に設ける必要がある。

○ 「生きてはたらく力」について

子どもたちにとって「生きてはたらく力」となるためには、活動して終わりではなく、しっかりと振り返り、気づきを自覚させることが大切である。そのためには、自分の活動を記録に残したり、具体的な活動や体験を通して得た気づきが、活用できるような場面を設定したりする必要がある。

2 県内の自主的研究活動の取り組み状況

本次の研究活動においては、充実した実践研究活動がなされた。多くの学校で、目の前の子どもの姿をとらえるとともに、教育課程の編成に明確な方針をもち、その方針に沿って具体的な手だてを設定して授業づくりに取り組んでいる様子が見られた。

本次の特徴としては、子どもたち一人ひとりの思いや願いの実現にむけて、主体的に対象へかかわらせている実践が多くみられた。また、仲間や園児、地域の方等、さまざまな人とかかわる場をもち、対話的な活動の充実を図る実践が多く見られた。生活科を通して子どもたちの自立の基礎が養われていく確かな実践が進められていることが感じられた。

本次の研究集会では、発表時間は5分、発表を学年別の配列とした。総括討論では、「他者とかかわり方について」「コロナ禍でもできるかかわり方について」をテーマに話し合ったことで、充実した討論が行われた点が評価される。

III 授業実践

実践1 伝え合う活動を通して自分自身の成長に気付くことができる子どもを育てる生活科学習

2年(18時間)

単元 「学区の秘密はっけん」

1 実践のねらい

わたくしは、生活科の学習の中で伝え合う活動を通して自分自身の成長に気付くことができる子どもを育てたい。このような子どもはすすんで友だちや身近な人と関わり合いながら自信をもって学校生活を送ることができるようになることを考える。これは、生活科がめざす自立し生活を豊かにしていくために必要な資質・能力である。本研究では、伝え合いを通して意欲や自信をもって学んだり生活を

豊かにしたりするために、自分自身の成長に気付くことができることをめざす。

本学級の子どもは、思いや願いをもとに生活科の学習で体験活動から対象への気付きを得ることができるが、さらに思いや願いを膨らませ、次の体験活動に繋げていく姿があまり見られない。その大きな理由として、思いや願い、対象への気付きを十分に表現したり友だちと認め合ったりする経験が少なく、自分のよさや可能性に気付いていないからだとする。また、積み重ねた思いや願い、対象への気付きを活動毎に振り返る経験が少なく、自分自身の成長に気付くことができているからだと考える。

小学校学習指導要領解説生活科編では、伝え合い交流する場を工夫することに対して、「身の回りの人々から称賛されることによって、意欲の向上が図られることもある」と示されている。また、振り返りを表現する機会を設けることに対して、「活動や体験したことを言葉などによって振り返ることで、無自覚だった気付きが自分の中で明確になったり、それぞれの気付きを共有し関連付けたりすることが可能になる。」と示されている。

そこで本研究では、体験活動から得られた思いや願い、対象への気付きを工夫して伝え合い交流する場と活動や自分自身について振り返る場を設定することで、子どもが自分自身の成長に気付くことができるようにする。まず、思いや願い、対象への気付きを工夫して伝え合う場を設定し、多様な表現方法で認め合い自分のよさや可能性に気付くことができるようにする。そして、活動や自分自身を振り返る場を設定し、思いや願い、対象への気付きを可視化してポートフォリオにして積み重ねたものを振り返り、自分自身の成長に気付くことができるようにする。

2 活動計画（18 時間完了）

(1) 対象への気付きを工夫して伝え合い交流する場 **手だて1：伝え合い、認め合う活動**

体験活動によって得られた思いや願い、対象への気付きを身近な人と伝え合い交流する場を設定し、分かりやすく伝えるために言葉、絵などを使って工夫して表現し、伝え合う活動を行う。その中で、互いに認め合うことで、自分のよさや可能性に気付くことができるようにする。

(2) 活動や自分自身を振り返る場 **手だて2：自分自身の成長に気付く活動**

体験活動の後の振り返りの中で、活動や自分自身を振り返る場を設定し、体験活動で得られた対象への気付きや膨らませた思いや願いを可視化するために、顔イラストや文で表現する。そして、単元全体を振り返る場を作り、それらをポートフォリオにして積み重ねたものを読んだり、感想を文で記述したりすることで、自分自身の成長に気付くことができるようにする。

「学区のヒミツはっけん」（18 時間完了）

| 活動の流れ | 手立て1 | 手立て2 |
|----------------------------|---|---|
| (1) 学区のヒミツを見つけよう (5時間) | 地図アプリを使ったり、学区に詳しい人から話を聞いたりして得られた思いや願い、対象への気付きを伝え合う。 | 地図アプリや、地域の方の話から得られた思いや願い、対象への気付きを振り返って顔イラストと文にする。 |
| (2) お店のヒミツを見つけよう (6時間) | 調べたい店や施設の人にヒミツを聞いて、店や施設ごとに調べたヒミツを発表し合う。 | グループの発表を聞いて、得られた思いや願い、対象への気付きを振り返って顔イラストと文にする。 |
| (3) 学区のヒミツを伝え合おう (5時間) | 店や施設の人から調べたことを学年間で発表し合う。地域の方に調べたことやお礼の気持ちを伝える。 | 学年間の発表を聞いて、得られた思いや願い、対象への気付きを振り返って顔イラストと文にする。 |
| (4) すごいね みんなのはっけん (2時間) | 学年間の発表会での思いや願い、対象への気付きをメッセージカードにして調べた店や施設の人にお礼の気持ちを伝える。 | 今までのワークシートを讀んで、単元を通して得られた思いや願い、対象への気付きを振り返って顔イラストと文にする。 |

3 活動の概要

学区をより詳しく知るために、学区の秘密を調べることにした。「①1学期に探検していないところに行く」では、地図アプリを使って学級で探検を疑似体験した。教室にいながらでも行ってみたい学区の様子を全員で見ることができ、「工場が多いです。」「知らないお店がありました。」などいろいろな意見が子どもから出た。しかし、町づくりの工夫や詳細などの学区の秘密をあまり知ることができなかった。「②学区に詳しい人から話を聞く」では、伝馬小学区は安心して安全な町である、昔は海を埋め立てて田んぼにしたり、戦争時には工場ができたしたりしたなど、子どもにとって初めて聞く内容の話から秘密を知ることができた。さらに知りたい内容を調べるために、店や施設の人に聞いてみることにした。「③店や施設の人に聞いてみる」では、6つの店や施設について質問したいことや見たいことを考えて訪問することにした。自分たちのグループで質問したいこと、見たいことを考えた後に、それを学級全体に紹介し、他のグループからもどんなことを質問したり見たりしてきてほしいかを考えてもらった。そして、子どもたちは、新聞販売店で働いている人のところへ訪ね、少ない人数で働く工夫や営業時間を聞いて、朝早い仕事の大変さに気付くことができた。【資料1】



【資料1：質問を話し合っている様子】

手だて1：伝え合い、認め合う活動

訪問が終わった後に、働いている人や地域の人から学んだそれぞれの秘密をグループごとに「質問したいこと・見たこと・思ったこと」として「てんま小秘密マップ」にまとめてから、スピーチをして伝え合った。「お店で働いている人がたくさんいてびっくりしました。」「町のことをいっぱい知ってとてもうれしいです。」と学級での発表を振り返ることができた。

学級内の発表後、子どもは、「教えてもらったお礼の気持ちを手紙にしたり伝えたりしたいです。」「もっと他のお店について知りたいです。」「隣のクラスの調べた秘密も知りたいです。」「隣のクラスに調べたことを伝えたいです。」と自分たちの思いや願いを膨らませることができた。そこで、学年で伝え合うことにした。学年間で、学区の秘密を発表する会を、学区の見回りをしてくださる方や学区の歴史について教えてくださった方も招いて行った。紙人形劇、紙芝居、ポスター発表、クイズとそれぞれのグループで発表の仕方を工夫して得られた思いや願い、対象への気付きを伝えることができた。【資料2】「劇で発表していて、分かりやすかったです。」「神社のお祭りが、1年に7回もあるなんて初めて知ってびっくりしました。」「スーパーは一日に1600人もお客さんが来るのに店員さんが24人は少なく大変だなんて思いました。」と感想を述べ、子どもたちは学区の施設について気付きを得ることができた。発表会の最後には、地域の方へ手紙を手渡してお礼の気持ちを伝えることができた。【資料3】子どもたちは町探検で調べたことを発表して「〇〇さん（地域の方）に見てもらえてうれしかった。」「手紙が渡せてよかった。」という感想を記述していた。



【資料2：紙芝居の様子】

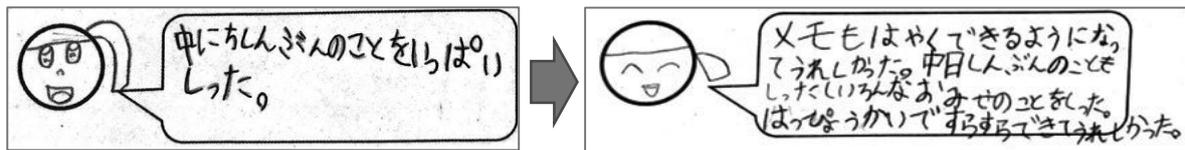


【資料3：手紙を渡している様子】

手だて2：自分自身の成長に気付く活動

子どもたちは、学級全体で地図アプリを使って町探検をしたり、地域の方から話を聞いたりして、「伝馬は海だ(った)と知りました。」と顔イラストと文で表した。「もっといろんな人に聞きたいです。」と自分の思いや願いを顔イラストと文に表した。その思いや願いをもとに店に訪問し、「〇〇新聞のことをいっぱい知りました。」と顔イラストと文に表し、営業時間から「〇〇新聞は朝早くからお店を開いて忙しそうだなと思いました。」と働いている人の様子に気付くことができた。

単元の最後に、ポートフォリオを振り返って「前は知らなかった町の秘密が分かって成長したと思いました。」「大きな声で発表をすることができるようになりました。」「メモも速くできるようになってうれしかったです。〇〇新聞のことも知ったし、いろんなお店のことを知った。発表会でずらずらできてうれしかった。」と感想を書き、自分自身の成長に気付くことができた。【資料4】



【資料4：ポートフォリオの記述の変化】

4 実践のまとめ

- 町探検で調べたことを、学年間や地域の方に紙芝居や紙人形劇など発表する方法を工夫して伝え合うことができた。
- 地域の方にお礼の手紙を書いて渡したり、町探検で調べたことの発表を地域の方に認めてもらったりしたことで、自分のよさや可能性に気付くことができた。
- 子どもの疑問や知りたいことをもとにした思いや願い、対象への気付きを積み重ねたポートフォリオを振り返ることで単元の始めと終わりの自分を比べ自分自身の成長に気付くことができた。
- 町探検で、店や施設について働いている人から話を聞くことで、仕事への思いやお客さんに喜んでもらうための工夫に気付き、共有することができた。
- 学区の店や施設の共通点として気付き関連付けた新たな気付きを得ることができなかった。

実践2 生き物に愛着をもち、自分の思いを表現する子の育成 1年(17時間)

—「生き物博士になろう」の実践を通して—

単元 「いきものとなかよし」

1 実践のねらい

学校の周りには畑や田んぼ、林が広がっており、自然豊かな環境で育った子どもたちは、自然の生き物や植物に興味のある子が多い。休み時間になると、校庭でカエルやトカゲ、バッタなどを探して捕まえる姿がよく見られる。しかし、生き物を捕まえることが面白いだけで、世話をせず死なせてしまうことがある。このことから、生き物の命を大切にしようとする意識が低いように感じられる。

子どもたちにとって身近な対象である校庭の生き物とのかかわり方に変化をもたせることで「もっと観察したい」「もっとやりたい」という意欲を引き出していく。意欲的に世話をすることで、生き物に愛着をもつ心を育てていく。生き物に愛着が生まれれば、その思いを伝えたい。そして、どのように表現すれば相手に伝わるのか、一生懸命に考えていこう。

このような姿を期待して、手だてを「①意欲的に生き物とかかわり、愛着を育むことができる場の設定」「②自分の思いを表現する場の設定」とし、本研究をすすめることにした。

2 活動計画 (17 時間完了)

| 時数 | 活動内容 | 手だて | 時数 | 活動内容 | 手だて |
|----|---------------|-----|----|--------------|-----|
| 1 | どうして死んじゃったのかな | ① | 8 | 生き物ビッグライト大作戦 | ① |
| 2 | 生き物調査に出発 | ① | 9 | | |
| 3 | お家を作って育てよう | ① | 10 | みんなで話し合おう | ② |
| 4 | 秘密道具を作ろう | ② | 11 | 手紙を書こう | ② |
| 5 | 秘密道具を使って観察しよう | ① | 12 | 研究発表会を開こう | ② |
| 6 | お悩み相談会を開こう | ② | 13 | | |
| 7 | 生き物博士から話を聞こう | ① | 17 | | |

3 活動の概要

(1) どうして死んじゃったのかな～生き物調査に出発

子どもが休み時間に校庭でトカゲを捕まえてきたが、世話をせず死んでしまった。学級みんなで死んだトカゲについて考え、次は上手に育てたいという思いが芽生えた。校長先生が生き物に詳しいことから、校長先生のような「生き物博士になろう」という目標に向かって活動が始まった。

学校にはどんな生き物がいるのか調査に行った後、どの生き物を研究するのか選び、グループを作り、名前を付けた。「カタツムリは卵の殻がいるって。私が持ってくるね。」「バッタは草とパンも食べるって。草はねこじゃらしだって。後で取りに行けるね。」と飼育方法について積極的に話し合う姿が見られた。

(2) お家を作って育てよう

飼育ケースの環境作りに取りかかった。コオロギグループが図画工作のために集めていた箱や、トイレトペーパーの芯などを家づくりに活用し始めた。「暗い所が好きだし、隠れ場が必要。」「じゃあ、箱を切って斜めに立てかけよう。」と話し合いながら隠れ場を製作した。

【資料1】コオロギたちが隠れ場に入っていくと、満足そうな顔を見せた。次に、食事をする場所を作り始めた。そのまま下に食べ物を置くと汚いからと、ヨーグルトの蓋の上にナスとキュウリを置いた。また、「ヨーグルトの蓋の上にラップを乗せてからナスとキュウリを置くと、掃除が楽」と工夫していた。コオロギグループの様子を見て、他のグループも箱や空き容器を使って、改良を行っていた。友だちと意見を出し合いながら、生き物が棲みやすい家を考えて製作することができた。



【資料1 完成した生き物の家】

(3) 秘密道具を作ろう～秘密道具を使って観察しよう

生き物の言葉が分かるようになる、秘密道具作りをした。双眼鏡やカメラ、糸電話のような物など、それぞれが秘密道具作りに熱中していた。秘密道具作りが完成に近づくと、「見てみて。ここから覗くとカメラになってカタツムリの写真が撮れるし、紙コップでカタツムリが話していることを聞くこともできるんだよ。」と秘密道具の説明をする子が出てきた。説明している子の周りに友だちが集まり、友だちに紹介したり、一緒に試してみたりと、子どもどうしの交流が自然に行われた。【資料2】



【資料2 秘密道具の
交流の様子】

秘密道具が完成すると、早速、秘密道具を手手にバツタへ話しかけていた『りんごきれいにしてくれてありがとう』って言ってたよ。掃除してよかった。」と、生き物の気持ちを考え、自分の言葉で表現していた。

(4) お悩み相談会を開こう

ダンゴムシグループが、うまく育てられずに悩んでいたので、「お悩み相談会」を開いた。ダンゴムシグループは今まで、水場としてティッシュに水を含ませて置いていたが、「私のグループみたいにシュッシュするといいよ。」という意見を受けて、霧吹きを持って来ることに決まった。自分の経験をもとに、アドバイスすることができた。

(5) 生き物博士から話を聞こう

目標としている生き物博士の校長先生を教室に招待して話を聞いた(資料3)。カエルについての話では、種類によっては泳ぎが苦手であることや腹から水を飲むことを教えてもらった。カエルグループは、博士の話を聞いて、泳ぎが苦手なカエルの水飲み場としても使えるように、水の量を調節していた。



【資料3 博士から
話を聞く様子】

(6) 生き物ビッグライト大作戦

生き物博士が話をする時に使った、新聞紙で作られた模型を見て、「作りたい。」と言った子がいた。そこで、「みんなで作ろうか。」と提案し、やる気満々で生き物ビッグライト大作戦」がスタートした。以前観察した時にワークシートにカエルを緑で塗っていた子が、ビッグライト大作戦では、「何色で塗るの。」と聞くと「茶色。」と答えており、以前よりもよく見ていることが感じられた。自分たちが作り上げた大きな生き物を抱きかかえて撫でたり、「かわいいね。」と話しかけたりしていた。【資料4】



【資料4 完成した模型】

(7) みんなで話し合おう～お手紙を書こう

世話を続けても死んでしまう生き物が出てきたので、この先のことを話し合った。飼いたいという立場からは「もっと一緒に過ごしたいから。」「自分たちにとって仲間だから。」という意見が出た。逃がしたいという立場からは「同じ仲間や家族と過ごさせてあげたいから。」という意見が出た。一緒に過ごしてきた生き物の幸せのためにどうすればよいのか、友だちの意見も聞きながら考えていた。最終的にグループで話し合っただけで決めた。意見が分かれてしまっても、自分の意見を伝えながら、相手の意見も聞き、お互いに納得できるように話し合うことができた。【資料5】

- C1 私は、まだ一緒にいたいから飼いたい。
 C2 私も、飼いたい。
 C3 僕は、飼わない。
 C1 なんで、飼いたくないの。
 C3 だって、死んじゃうかもしれないよ。
 死んじゃった姿は見たくない。
 C2 死なないように世話すればいい。
 C1 餌、がんばってとれば大丈夫。
 C3 分からないよ。餌あげても、病気になったら死ん
 じゃうもん。
 C1 じゃあ、いつまでなら飼っていい？
 最後は逃がすけど、もう少し飼おうよ。
 C3 明後日。
 C2 早すぎ。もうちょっと。
 C3 じゃあ、来週まで。
 C1 来週までなら、いいよ。来週のいつ？
 C3 昼放課がいい。昼放課に逃がそう。

[資料5 話し合いの様子]

逃がすグループはお別れの手紙を、飼い続ける
 グループは「これからよろしく」の思いを込め
 て手紙を書いた。「大すきだよ。いっしょにいた
 のは、たからものでした。」という言葉からは、
 生き物に対する愛着が伝わってきた。【資料6】

かるくん、けろちゃん、いっしょ
 にいてくれてありがとう
 うもくようびにいなくなるから、
 さみしいな。大すきだよ。
 いっしょにいたのは、たからも
 のでした。

[資料6 生き物への手紙]

(8) 研究発表会を開こう～生き物博士になれたよ

お世話になっている6年生、ともに勉強している1年生の他のクラスへ向けて、研究発表会を行
 うことになった。発表方法や発表原稿はすべて子どもたちが考えた。発表がスムーズにできるよう
 になると、互いに見せ合うようになった。「紙は横を持つと見やすいよ」などアドバイスをしてい
 た。発表本番が近づくにつれて、「もっと上手に発表できるようになりたい。」と、休み時間にも発
 表練習をするグループが出てきた。「6年生役をやる。」

と、他のグループの子も練習に自主的に参加していた。クラスで本番前のリハーサルを行った。「○
 ○さんが大きな声で言えていてよかった。」と友だちから褒
 めてもらい、自信へと繋がられた。

発表本番、クイズに積極的に答えたり、拍手をしたりす
 る6年生の温かい雰囲気もあり、1年生の子たちはだんだ
 ん笑顔で発表できるようになっていった。【資料7】発表
 後、「緊張して『言えない』と思ったけど、大きな声で言え
 て、めっちゃいい気持ちだった。」「準備の時にみんなで力
 を合わせたから、自信をもって言えたよ。」と笑顔で言う様
 子からは、満足感が伝わってきた。



[資料7 6年生へ発表する様子]

4 実践のまとめ

- 生き物とのかかわり方に変化をもたせることで、意欲的に生き物とのかかわり、愛着を育んでいっ
 た。生き物への手紙や休み時間にも一緒に過ごす様子、単元が終わっても墓に花を供え続ける様子
 からは、命を大切にしている気持ちが伝わってきた。
- 自分の思いを表現する場を設定したことで、一生懸命に考え、自分の思いを言葉で表現するこ
 とができた。

実践3 主体的な活動を通して、事実と思いを表現し、気づきを高める子どもの育成
2年（5時間）
－2年生活科「おいしくなあれ わたしのやさい」の実践を通して－
単元 「花や やさいの 大きくなる ひみつ はっけん」

1 実践のねらい

子どもたちは、生活科の授業が大好きである。教室から外へ飛び出し、植物や生物の様子を見つけ出すことを、喜んで行う。一学期当初も、生活科の時間は大人気で、意欲的に参加する姿が見られた。しかし、気づきを記すワークシートを見ると、記述をほとんどしていない子が数名いた。また、「かわいい」「すごい」といった抽象的な記述にとどまる子も多かった。意欲を学びに変え、思考力・表現力をのばしたいと考えた。また、野菜の栽培により、植物の生命や成長、自分自身とのかかわりに気付くようにと願い、本主題を設定した。

2 活動計画（5時間完了）

| 時 | 学習課題 | 学習活動 | 手だて |
|-----|----------------------|---|-----------|
| 1 | ミニトマトの苗を植えよう | ・ミニトマトの苗を観察する。 ・鉢植えを行う。 | |
| 2 | ミニトマトに名前をつけよう | ・ミニトマトの名前を考え、鉢にネームプレートを立てる。 | i |
| 国語科 | ミニトマトの観察をグレードアップさせよう | ・観察で何をどのように記録するとよいかを学ぶ。 | iv |
| 3 | ミニトマトの観察をしよう | ・国語科での学びを意識して、観察を行う。 | i iv v vi |
| 授業外 | トマトのお話を読もう | ・トマトに関する絵本の読み聞かせ ・野菜の栽培に関する本を読む。 | ii |
| 算数科 | いろいろな物の長さを測ろう | ・定規の使い方、cm や mm といった単位の記述法をいかして、さまざまな物の長さを測り記録する。 | iv |
| 4 | ミニトマトの観察をしよう | ・算数科での学びを意識して、観察を行う。 | i iv v vi |
| 家庭 | ミニトマトを使ったレシピを調べよう | ・家庭でミニトマトを使ったレシピを調べる。 ・ミニトマトの成長状況を家庭で報告する。 | iii |
| 5 | ミニトマトの観察をしよう | ・これまで学習した観察方法を意識して、観察を行う。 | i iv v vi |
| 家庭 | ミニトマトを食べよう | ・家庭でミニトマトを食べ、レポートを書く。 | iii |

めざす子どもの姿

- I 野菜の栽培や観察を積極的に行うことで愛着を深め、野菜がもつ生命を大切にできる子ども
- II 見つけた事実と自分の思いの両方を記述により表現し、植物が生命をもっていることや成長していること、また、それらには自分自身も関わっていることに、気付くことができる子ども

仮説1 「主体的な活動」

ミニトマトに対する関心を高める活動を行ったり、家庭とのつながりを実感できる場を設けたりすれば、子どもたちは栽培や観察を積極的に行うことができ、ミニトマトへの愛情を深めながら、野菜がもつ生命を大切にできるようになるだろう。

- 手だて i ミニトマトの命名
- 手だて ii 絵本の読み聞かせ
- 手だて iii 家庭との連携

仮説2 「表現し、気づきを高める」

他教科での学びをもとに、事実や思いを具体的に記述し表現する力をのばせば、子どもたちは、植物が生命をもっていることや成長していること、また、それらには自分自身も関わっていることに、気付くことができるだろう。

- 手だて iv 教科横断的な学習
- 手だて v メモエリア
- 手だて vi お手紙エリア

3 活動の概要

(1) ミニトマトとの出会い

子どもたちは、嬉しそうに苗を受け取り、ていねいに鉢に植えた。その後、初めての観察を行った。自由に絵や文を書く活動が苦手なAは、観察カードの記述量が少なく、事実の記述は「茎が高く伸びている」ということだけだった。Bは、観察カードいっぱい記述できていたが、ほとんどが「早く育てほしい」ということの繰り返しになっており、意欲を具体的な観察力につなげる必要性を痛感した。

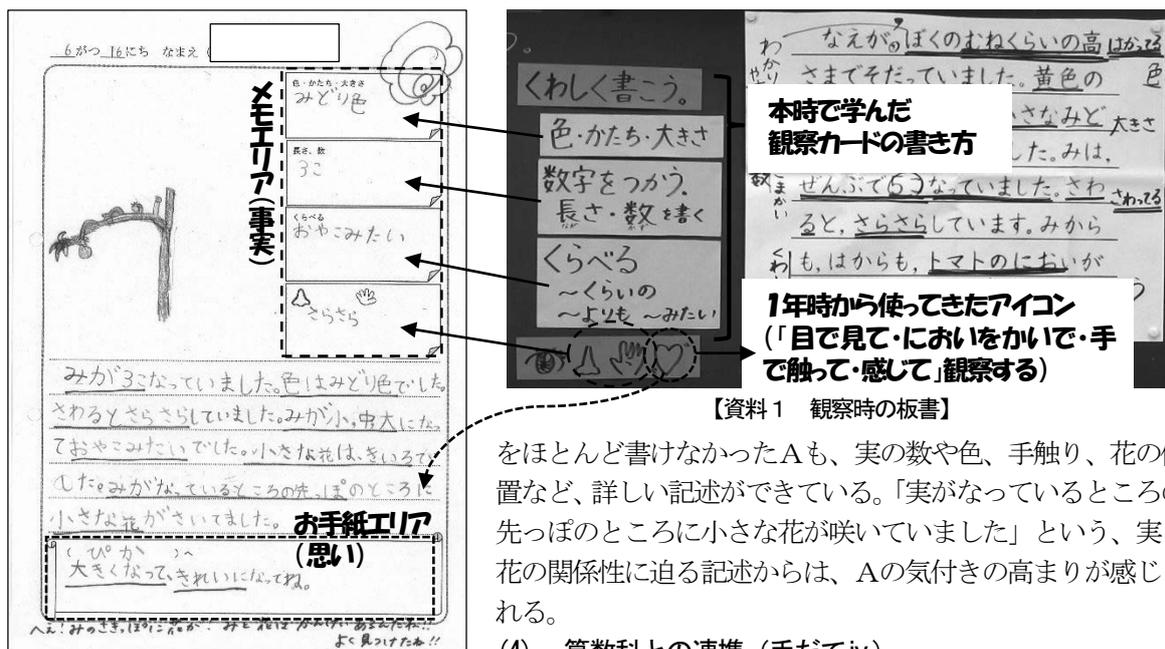
(2) ミニトマトへの命名 (手だて i)

自分のミニトマトの名前を考え、ネームプレートを立てる活動を行った。クラス内に、同じ名前のトマトは一つとしてなく、子どもたちのなかに、唯一無二の自分のミニトマトという愛着の芽生えを感じた。

(3) 国語科との連携 (手だて iv・v)

国語科「かんさつしたことを書こう」の単元での学習では、子どもたちから「実や葉の数を書きたい」「体と比べたい」「触り心地も書きたい」と、具体的な書き方が挙がった。ここでの学びと意欲を観察につなげるため、子どもたちから出た意見をまとめ、観察の際には毎回黒板に貼り、確認できるようにした。(資料1) また、その項目と連携したメモエリアを観察カード上に設けることで、外での観察時にも短時間で具体的な記述ができるようにした。(資料2)

子どもたちの観察カードは、見つけた事実が具体的にになり、記述量も増えた。前時には、具体的な事実



【資料2 Aの2回目の観察カード】

をほとんど書けなかったAも、実の数や色、手触り、花の位置など、詳しい記述ができています。「実がなっているところの先っぽのところに小さな花が咲いていました」という、実と花の関係性に迫る記述からは、Aの気づきの高まりが感じられる。

(4) 算数科との連携 (手だて iv)

算数科「長さ」の単元で、正確な計測の仕方の学習と、教室内のさまざまな物の長さをものさしで測り記録する活動を行った。その後の観察で、長さを計測し記録した人数は、前回の観察時よりも6人増え、14人に上った。また、思いの記述が多かったBも、この算数科の授業の後、継続的に長さを計測するようになり、「35 cmも伸びていてびっくりしたよ」とお手紙エリアに書くなど、成長に気付くことができた。

(5) 絵本の読み聞かせ (手だて ii)

トマトを扱った絵本2冊の読み聞かせを行ったところ、栽培への意欲が低下し始めていた子たちも、水やりを再開した。さらに教室内に『ミニトマトしよかん』を開設し、野菜栽培に関する本を並べたところ、それらの本を読む子も出てきた。絵本が、関心を高める手だてとして有効であることが見て取

れた。

(6) 事実から、成長に気付く (手だて v・vi)

苗を植えてから1か月後の観察で、実について言及した子は30人中27人おり、その27人全員が、実の数や手触り、匂い、大きさなど、具体的な記録を残した。

さらに、お手紙エリアを見ると、「大きくなったね。このまま暑さに負けないで。」「私の身長くらい大きくなってすごいね。」など、成長するミニトマトに対して愛情ある言葉をかける子がたくさんいることが分かる。子どもたちは、具体的に事実を記録していくことで、ミニトマトの成長に気付くことができ、さらに自分のミニトマトへの愛着を深めつつあるといえる。

(7) ミニトマトのレシピ調べ (手だて iii)

「ミニトマトを使ったレシピを調べる」という課題を出した。この課題で、Bはトマトが苦手だということが判明した。Bは「トマトは苦手ですが、このレシピならおいしく食べられそうです」と綴った。学校生活だけでは見られない子どもの一面を知ることができ、さらに保護者からの励ましでミニトマトを育て食べることへの意欲を高めることができた。

さらに、レシピ調べ後の観察では、お手紙エリアに「家族を笑顔にしてね」など家族に関する記述をする子が増え、愛情の深まりが見られた。

(8) ミニトマトを食べる (手だて iii)

『ミニトマト食べたよレポート』で、Aは「自分で作ったピザパンなので、お店で買ったピザパンよりもおいしいなと思いました」と綴っている。ミニトマトの栽培や料理に自分が関わった結果、食事をよりおいしく感じた経験は、Aが今後の生活をより豊かにするのに役立つだろう。

トマトが苦手なBは、バンバンジーを作った。保護者の記述にも「生のトマトは食べたことがなかった」とあり、Bにとって挑戦であったことが分かる。Bの「自分で育てたトマトは、すっばくてもおいしかったです。家族みんなに食べてもらえて嬉しかったです。」という言葉からは、自分が栽培してきたミニトマトを大切に思う気持ちが伝わってくる。

このような子どもたちの様子からは、ミニトマトを大切にできた自分自身に気付く姿も見られた。まさに、主体的な栽培・観察を通して野菜に対する愛情を深め、気付きを高めることができたといえる。

4 実践のまとめ

- ミニトマトへの命名により、子どもたちは自分のミニトマトを唯一無二のものにとらえることができた。(手だて i)
- 絵本の読み聞かせや家庭との連携により、野菜作りへの関心を高めることができた。(手だて ii・iii)
- ミニトマトへの愛着の深まりが、ミニトマトへの声かけや、トマトが苦手な子がミニトマトを完食した様子に表れた。
- 国語科や算数科での学びをいかすことにより、観察カードの充実が見られた。(手だて iv)
- メモエリアを活用して、事実を記録する能力の高まりが見られた。(手だて v)
- お手紙エリアには、ミニトマトの成長に気付いたからこそ、ミニトマトを応援したくなったり、家族に食べさせたくなくなったりした思いが綴られた。事実と思いを継続的に書き記したことにより、子どもたちが気付きを高めることができた。(手だて vi)
- 子どもたちの気付きをさらに高めていくために、友だちどうしの対話の場を増やすとよかった。

Ⅳ おわりに

1 研究のまとめ

(1) 生活科という教科の特性にかかわって

○ 感染症拡大防止策をしながら、従来の学習活動を行うことが困難な中、多様な手だてを講じ、少しでも子どもたちが、さまざまな物や人、対象と繰り返しかかわることができるよう環境を整えることが重要である。具体的な活動や体験を通すことで、よりいっそう気付きの質を高めていくことができると考える。

○ タブレットを活用した実践が多く見られるようになった。コロナ禍において、タブレットを効果的に活用することで、教育効果の高まりが期待される。しかしながら、タブレットに頼りすぎることなく、実物と触れ合うことの良さ、カメラ機能で観察を済ませるのではなく、たとえ上手に描けなくとも、対象を見て子どもが感じたままに描いた観察画から教員が子どもの気付きを引き出してしくことよさについて理解した上で、タブレットの活用場面を考え、効果的に活用していくことが重要である。

○ 子どもの姿を見取るための一手段として教員と子どもとの対話を繰り返し、思考を深めたり、気付きの質を高めたりすることが大切である。対話は直接会話をするだけではなく、朱書きによる対話も有効である。子どもの姿を見取ることは、子ども一人ひとりを評価していく上でも重要である。

(2) 生活科における子どもの学びについて

○ それぞれの単元の学習の中で、子どもが対象（人・こと・もの）とかかわり、対象への気付きを得ていく。さらに、その対象への気付きを通して、自分のよさや友だちのよさなどに気付くことができる。このような「成長した自分」に気付くことができるようにするために、学習活動の振り返りを行うことが、とても重要である。振り返りの方法は、学習活動や子どもの実態に合わせて工夫する。こうして自分自身の成長への気付きを積み重ねることで、子どもたちは自分に自信をもち、自立への基礎を身につけていくことができると考える。

2 来年度に向けての課題

- 学校や地域の特色を生かした教材の発掘。
- 幼保小連携と生活科を核としたスタートカリキュラムのあり方。
- 具体的な体験活動における効果的なタブレットの活用方法。
- 子どもの思考を深める効果的な交流活動の在り方。
- カリキュラムマネジメントを意識した実践のあり方。
- 新学習指導要領において求められる子どもの力と評価。